佐藤　優　評

試験に出る哲学

「センター試験」で西洋思想に入門する

斎藤哲也著（NHK出版新書・929円）

毎日新聞 2018.10.1.

日本の高校教科書には国際水準で見ても優れたものが多い。ただし、社会人が勉強し直すには少し退屈だ。高校教科書の内容を、工夫して、社会人向けの哲学入門書に仕上げたのが本書だ。斎藤哲也氏は、東京大学文学部哲学科を卒業した後、大手通信添削会社のZ会で勤務し、その後、フリーランスの編集者兼ライターになった人だ。出版界で斎藤氏の能力の高さには定評がある。評者も何度もお世話になっている。

評者は、同志社大学神学部の1～2回生を対象とする講義で高校倫理の教科書を基に演習問題を解かせている。哲学、神学の基礎知識をつけるのに高校の倫理はすぐれている。その基本知識を問う大学センター試験の問題が優れているのは当然だ。

難しい事柄を易しく言い換える

斎藤氏は、それを用いる理由についてこう述べる。＜日本史や世界史を概観するのに高校の教科書が役立つように、大学生や社会人が哲学のあらましを知るうえで、高校倫理の内容は難易度としてちょうどいい塩梅なのだ。／むろん、本書のタイトルや内容を見て、違和感をもつ人もきっといるに違いない。哲学の原義である「知を愛し求める」態度からすれば、センター試験と結びつけて哲学を解説する本なんて邪道もいいところだろう。（中略）知人の予備校講師も「試験に出ないことを話すとクレームが入る」とこぼしていた。現代にソクラテスがいれば、こっぴどく叱られそうだ。／でもその一方で、過去二〇年ほどのセンター倫理を読み込むと、出題者の苦心のさまもよく見えてくる。きっと出題者だって、プラトンやデカルトの思想をマークシート式で答えさせたくはないはずだ。選択肢問題という制約のなかで、どれだけ哲学や思想の本質的な理解を問うことができるのか。その工夫が、問題文や資料文、原典からの引用、個々の設問内容などにあらわれている。／本書で、センター倫理の問題を導入として用いた理由もそこにある。出題者の工夫が詰まったセンター倫理の問題は、「大学合格のため」という意識を外せば、哲学に入門するうえで適切なガイド役となってくれるのだ＞

評者も斎藤氏の見解を支持する。ソクラテス以前の哲学、ソクラテス、アリストテレス、ストア派、エピクロス派、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、ロック、ヒューム、カント、ヘーゲル、マルクス、キルケゴール、ニーチェ、デューイ、ハイデガー、サルトル、ウィトゲンシュタインなどの思想の基本を本書1冊で学ぶことができる。斎藤氏には、難しい事柄を、その意味を変化させることなく、易しく言い換える特異な才能がある。例えば、ハイデガーが説いた、非本来的な人間のあり方「ダス・マン」（誰でもない人）からの脱却についてこう説明する。＜現存在である人間が、ダス・マンの状態から脱するためには、自分の死を見据えることが必要だとハイデガーはいいます。すなわち、死を自覚することで、人間は「自分はこのように生きなければならない」という良心の声に気づくのだ、と。／このように、死の逃れがたさを直視し、死の自覚を介して、本来的な自己（実存）に立ち戻ろうとするあり方を、ハイデガーは「先駆的決意」と名づけました＞。斎藤氏の技法は、高校や大学の教師にとっても有益なので、教育技法の本として読むこともできる。

学知は、大学合格のための手段ではない。高校レベルの倫理に取り組むことが人生に役立つ教養を身につける上で有益であると教えてくれる一冊だ。